

「俺の顔って醜いですか？」

総園長 宮下 智

彼が自殺をほのめかして学園を抜け出したのは、ちょうど10年ほどの前のできごとだったろうか。深夜のできごとで、「煙草を吸いに行く」とのことで屋外に出たまま、所在不明になったのだった。2～3日前から「死にたい…」というようなことを呟いていたということで、みんなの不安が急に高まった。深夜に多くの職員がでて広い範囲の探索に当たった。しかし、名前を呼ぶ声がすれば、上手に隠れることができる人だったし、たとえ見つかっても逃げていこうことは容易に想像できたから、数時間捜し歩いた後は、明るくなって本人が助けを求めしか見つける方法がないことを、皆で確認しあった。

自殺の可能性があるということで、警察の方々も本気になってくださって、松本市から探索用のヘリコプターを飛ばしたらどうかとか警察犬を手配した方が良いのではないとか、最大の協力を惜しまない提案を次々にしてくださった。

結局、朝方になって、近くを通った牛乳配達員の自転車の乗ったおじさんに本人か声をかけたことで、無事に保護することができ、学園に戻ることができた。

❖ ❖ ❖ ❖

彼の自殺の動機は、こんな大事件があったことで（いつもピンチはチャンスなのだ！）、本人の口から説明を聞くことができた。

「俺はずっと嫌われている」「俺の顔は醜い、目も鼻も口も、みんな醜い」「俺は頭が悪いからみんなに馬鹿にされている」、そんなこんなが、かれの「死にたい」理由だった。

しかし、このようなずっと抱えてきた自分のコンプレックスについて、彼が私たちの前で言語化できたのは初めてのことだったのだ。深夜の所在不明は確かに良からぬことではあるけれど、それは私たちに対しての拒否ではなく、どちらかといえば、私たちへの信頼であることが、彼のこの初めてのコンプレックスの言語化で知らされるのである。自分の弱みを見せること、またそれが一番心の奥にあるコンプレックスであるとするなら、それは信頼するからこそその告白なのだ。

❖ ❖ ❖ ❖

10年前の彼は、「お小遣い」と「たばこ」の切れ目が縁の切れ目の人だった。多くはたばこの購入のせいでお小遣いが底をつくわけなのだが、底をついた途端、昨日まで穏やかだった人が、イライラとその爆発の人に豹変してしまうのである。大きな体躯はさらにその恐怖感を職員に与えた。「いつ殴られるかわからない」、職員の足は次第に遠のき、最小限のおつきあいを残すだけの人になっていった。

居室は汚れ、布団やシーツもコーヒーの飲みこぼしなどで汚れていった。「煙草、買ってきて」が唯一のコミュニケーションになっていった。

彼は精神病院生活が長い。中学の時にはもう精神科通院が始まっていて、現在は60才後半、それまでの50年間の半分以上が精神病院生活だ。明星へ入所した後も彼は孤立した生活を送っている。話すことができる、歩くことができる、道には迷わない、お金の支払いができるということで、彼は一日の多くの時間を近隣の、それでも歩けば30分はかかる喫茶店で、日がなコーヒーを飲んで時間をつぶした。

そんな暮らしを自己決定の結果だと表現することはたやすいが、実はここには大きな落とし穴がある。確かにこの暮らしぶりは、自己決定には違いないが、これは極めて消極的な自己決定の姿なのである。しょうがないからそうしている、他に選びようがないからそうしているに過ぎないわけで、背景にある気持ちは、「ひとりぼっち気分」「大きな寂寞感」なのだ。「どうせ俺は皆に嫌われている、どうせ俺は一人ぼっちなんだ」その気持ちが、一人喫茶店行きなのである。

❖ ❖ ❖ ❖

その「一人ぼっち気分」からまずは救い出したのは、中学校の同級生のKさんである。たまたま来た同窓会開催の通知、そして懇親会、彼は参加したいという。同窓会費の5000円はその頃の彼にとって破格の大出費だ。懇親会で浮いてしまわないように、近況を書いたメモとアルバムを持って彼は参加した。話し下手の彼であっても、近況のスナップショットを持参すれば、話の輪に入ることができるだろうと苦肉の策である。帰園した彼が言った。「園長が二次会のお金をくれなかったので、二次会に行けなかった」と。そして、その場で出会った旧友のKさんがその後も、彼の電話の相手になったり、時々食事をしたりとい

う関係で、彼を支え続けている。

初めは、電話口に出るのも緊張と遠慮でかなわぬ彼だったが、少しずつすんなり電話口に来れるようになり、一言、二言をかわせるようになっていく彼である。

彼は、気持ちを言葉にするのが苦手だ。また、発音がもう一息はっきりしないのと超早口のせいで、なかなか慣れないと聞き取れないのとで、それがさらに彼を引っ込み思案にしている。

それでも、Kさんとの出会いと係わりが少しずつ彼の気持ちを融かしていくのを感じ取ることができた。

「一人じゃないんだ……」

✧ ✧ ✧ ✧

次の蜘蛛の糸は、従妹のA子さんとその息子のB男さんの存在である。身寄りがない彼に何とか面会の相手をお願いしたところ快諾してくださったのだ。何十年もおつきあいがなかった親族にお願いされたとはいえ、面会の相手を快諾していくことはなかなか難しいことであると思う。ましてや彼はなかなかの、いわゆる問題のある方で、それも含めて大変な決断である。

A子さん、B男さんとの間で、彼は、今まで経験が乏しかった家庭的な雰囲気味わうことになる。彼がA子さん宅を訪れたその時、Aさんが煙の中、彼のために彼の大好きな秋刀魚を焼いていたところだったというようなエピソードは、彼のさびしい気持ちをジワッと埋めることになったのではないかと思う。

そして、彼の思い出の中に、幼な友達として息づいているB男さんとの関係はさらに重要である。あの小さいころのB男ちゃんが、B男さんになり、自分と酒を飲み交わすまでになっている。その何十年間の日々は、途切れ途切れだった彼の人生を連続した一本の線として結び直したに違いない。そして、その線はあくまでもポジティブだ。

こんな係わりの中、彼はどんどん穏やかな人になっていく。

ある時、彼は若い容姿端麗な女性職員のことを好きになった。手紙を書こう、プレゼントを贈ろう、そんな気持ちが沸き上がった。それでも手紙もプレゼントも支援職員の大きな応援と手助けが無ければ、なかなか前進が難しかった。苦労の上のメッセージには、女性職員からはいつでもポジティブメッセージが届けられて、彼には少しずつ「好かれる」ことへの自信が芽生えていったに違いない。

✧ ✧ ✧ ✧

そして、三年ほど前のこと、彼を大きく変える出来事が起こった。女性職員が自分のお子さんを連れて学園に来た。まだ幼な子だ。彼はその幼な子と手をつないで歩こうとした。するとその幼な子が、嫌がりもせず手をつないで歩いてくれたのだ。

それは、「俺はずっと嫌われている」「俺の顔は醜い、目も鼻も口も、みんな醜い」「俺は頭が悪いからみんなに馬鹿にされている」、そんな抱えてきたコンプレックスが一度に氷解する出来事だった。

彼のそれからの感情表現力は、飛躍的に最大となった。電話では自由に話ができる、手紙を書こうと代筆する職員に次々と浮かんでくる言葉を流れるように伝えることができる…。

彼は、解き放されたのだ。すっかり人柄が変わったのだ。

✧ ✧ ✧ ✧

施設で働いていると、入所している彼らを変えるのは支援職員だけだといふ考えてしまう。でもそれは大きな勘違いだ。傲慢な態度だと言っても良い。

その人と結ぶ人間関係全てが、その人を変えていく力がある可能性がある。それを見つけ、それを応援することが支援職員の本来の専門性なのだろう。

今、すがすがしい顔をして事務室を訪ねてくる彼がいる。そこには、昔のイライラした暗い顔のかけらもない。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp/>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1/>